カール・クラウスにおける「言語問題」への転回点

——エッセイ「ハイネとその結果」の諸問題——

河　野　英　二

本稿は，カール・クラウスが彼の代表的かつ問題的なエッセイ「ハイネとその結果」(Heine und die Folgen) において行ったハインリヒ・ハイネの作品と思想への批判的な論評を，その本来の意図において捉える試みである。

「ハイネとその結果」(以下ハイネ論と略記) の成立は，クラウスが社会生活と表現活動の上で起こした顕著な変化と深く関わっている。これが最初に発表されたのは，1910 年 5 月に彼が地元ウィーンで催した第一回目の朗読会においてであった。彼は既に同年 1 月にベルリンで朗読会の活動を始めており，以後それは彼の没年までドイツ語圏内外の各地で頻繁に行われたのである[1]。ハイネ論は同年 6 月に再びウィーンで朗読された後，11 月に小冊子として刊行された。朗読会の開始に続いて，1911 年 4 月に彼は友人の建築家 A・ロースを名親としてウィーンのカトリック教会で洗礼を受けている。更に同年 9 月には，クラウスが編集・発行し，自らの諷刺的あるいは論争的な著作活動の拠点とした個人誌『炬火』にもハイネ論が転載され，12 月以降は『炬火』の文章全体をクラウスが単独で執筆するようになった[2]。その間に書かれたアフォリズムと短文を除けば，ハイネ論はまだ寄稿者がいた時期の『炬火』に掲載された最後の自作ともなったのである。そもそも，彼がハイネ論をこのような複合的な過程を通じて発表したことは，他の著作に対しては殆ど取られなかった異例の処置であった。

クラウスはハイネ論を『炬火』に転載する際に「前書き」(作品集では「後書き」) を，更にこれらを作品集『黒魔術による世界の没落』(Untergang der Welt durch schwarze Magie, 1922) に収めるための編集段階では「生の方向の間で」(Zwischen Lebensrichtungen) と題されたハイネ論の「結び」(1917) を執筆している。やはり他の作品の場合には見られなかったこのような扱いを通じて，ハイネ論に格別の重要性が付与されていたこと，及び「後書き」の中で「読者を見出す」(IV 213)[3]意図が明言されていることから，ハイネ論をクラウ

---

1) 自作の朗読から始まったこの朗読会では，やがて J・ネストロイなど他の多くの作家の戯曲や叙情詩も取り上げられるようになり，それは 1925 年には「文芸劇場」(Theater der Dichtung) と命名されて通算 700 回に渡って行われ，クラウスの表現活動の重要な一角を占め続けた。ドイツ語圏以外では，1925-27 年のパリ公演が知られている。

2) 但し 1912 年 5 月発行の号に掲載された，ドイツ語圏外からの代表的な寄稿者だった A・ストリンドベリの一幕劇，›Eselsdorf‹ は唯一の例外である。

3) 以下，Karl Kraus: Schriften. 12 Bände. Ch. Wagenknecht (Hrsg.). Frankfurt am Main 1986-1989. からの引用は，本文中に巻数をローマ数字で，頁数をアラビア数字で表記し，Karl Kraus (Hrsg.): Die Fackel. Neuausgabe. München 1968-1976. からの引用は，略号 F の後に号数と頁数をアラビア数字で添えて表記する。

スの思想的な宣言文と見なす根拠が得られるであろう。このことは本文の内容からも推測できる。即ちこの作品が予告段階で「ハインリヒ・ハイネに抗して——言語問題に寄せるアフォリズム」(Gegen Heinrich Heine. Aphorismen zum Sprachproblem) と標記されていたことが示すように，そこではクラウスが生涯を通じて中心主題の一つとした言語をめぐる諸問題が，初めて包括的に論じられたのである。遺作となった『言語』(Die Sprache, 1937) に集成された著作は，彼が言語思想家として示した第一次世界大戦以後の歩みを明瞭に伝えているが，そこでもハイネ論への言及は行われていた[4]。以上のことからハイネ論は，これが書かれた時期を過渡期としたその後のクラウスの文筆活動の出発点として位置づけられ得る著作であると言えよう。更にこのエッセイは，彼の特徴的な表現形式が彼の「アフォリズム」観を含む暗示的な創作理論と共に駆使されている点でも注目に値する。

以上の点を顧慮することは，クラウスがこの著作でハイネに対して取った態度について考察する上で不可欠である。M・ボリエスが指摘しているように[5]，ここである種の攻撃が行われたこと，そしてそこに不当な要素も含まれていたことは否定できない。しかし後に述べるように，その記述には評価の両面性ないし矛盾が見出されるのであり，そこには主題としての言語観とも密接に関わる問題が伏在しているのである。以下これらの問題を，必要に応じて同時期の他の著作をも参照しつつ論じることにする。

I　ジャーナリズム批判からハイネ論へ

ハイネ論において「言語問題」が論じられた際の視点と方法は，それ以後のクラウスの言語論の場合と同様に学術的な性格のものではなく，彼が執筆活動において得た自らの体験に依拠している。彼は『炬火』創刊時から一貫して言語への問題意識を持っていたが，ハイネ論には彼の言語観が発展過程で辿った軌跡が重層的に集約されていると考えられるのである。

ハイネ論の「後書き」でクラウスは，この作品の趣意が「ハイネの詩文の評価」ではなく，「ある生活様式，即ちその中で一切の非創造的なものが決定的にその居場所と，華やかさの陰に悲惨さを秘めたその暮らしを見出したある生活様式の批判」(IV 214) にあったことを語っている。これはそのまま，彼の初期の活動を導いた思想の要約であると言えよう。その中心主題は，ジャーナリズム批判であった。『炬火』創刊号の綱領で「響きの良い『我々は何をもたらす (bringen) か』ではなく率直な『我々は何をくたばらす (umbringen) か』」(F1, 1) を標語として以来，彼は当時の社会と文化への辛辣な批判を展開したが，そこで当初から最も頻繁に攻撃の対象となったのが『ノイエ・フライエ・プレッセ』に代表

4) ›Wortgestalt‹ (1921), ›Überführung eines Plagiators‹ (1921), ›Der Reim‹ (1927) にそのような言及が見られる。なお ›Der Reim‹ では，ハイネ論の書かれた当時，「言語の諸問題を新たに解明するためには「ハイネとその結果」という著作を除いて殆ど何も呈示されていなかった」(VII 355) という自負が語られている。

5) Mechthild Borries: Ein Angriff auf Heinrich Heine. Kritische Betrachtungen zu Karl Kraus. Stuttgart 1971, S. 22ff. を参照。

される当時の商業ジャーナリズムだったのである[6]。いま触れた一節における言葉遊びでは，新聞の進歩主義的な姿勢と呼応して多用されたものと考えられる「我々は何をもたらすか」という常套句が，単に彼の批判的な観点に沿うように変形されただけではない。同じ綱領の中で「広大な常套句の泥沼を干拓すること」(F1, 2) が活動目標に掲げられたことから判るように，彼はそのような常套句の使用に現れたジャーナリストの画一的な思考にも重大な問題性を認め，この「非創造的なもの」に動詞の語根の共通性によって得られた自らの機知に富んだ着想を効果的に対置したのである。

ジャーナリズムとその言語に対するこうした批判的関心は，既に1890年代初頭から様々な新聞と雑誌に諷刺的な文章を寄稿していた初期のクラウスの経歴を特徴づけるものでもある。「若いウィーン派」の作家たちを諷刺した当時の小冊子『取り壊された文学』(Die demolierte Literatur, 1896) で文名を高めた彼は，続いて1899年には『ノイエ・フライエ・プレッセ』に「若いウィーン派」の寄稿先でもあった文芸欄の執筆者として招聘されたが，これを拒絶して非商業誌『炬火』を創刊したのである。H・アルンツェンによれば，当時のウィーンではドイツ語圏の他のどこにも増して新聞と文学の結合が起こっていたが[7]，クラウスのこの行動にそのような事態を譴責する意図が含まれていたことは明らかであろう。事実「新聞は，特にオーストリアで，文学を食い物にした」(F58, 17) などの記述が，初期の『炬火』には頻出しているのである。その動機の一端もまた，ハイネ論に見出すことができる。即ちクラウスは文芸欄等の新聞記事を「文学的な装飾」に分類し，それらをA・ロースが『装飾と犯罪』(Ornament und Verbrechen, 1908) で批判した日用品の装飾と比較して攻撃しているが，そのような「ジャーナリズムへの精神的な諸要素の混入」は「より破局的な混乱に至らざるを得なかった」と述べた (IV 188 f.)。この洞察は，「モラルと犯罪」(Sittlichkeit und Kriminalität, 1902) を初めとする連作エッセイの主題に関わっていると考えられる。そこでは例えば，性道徳の向上を美辞麗句で説く傍ら，娼家の広告を掲載して営利を得るような態度に現れた新聞の欺瞞が，性風俗を頽廃させる真因として糾弾されたのである。このような観点は，戦時報道に文学風の粉飾を施して戦争協力の目的を隠蔽する新聞の策略を引用のコラージュによって暴露した戯曲『人類最期の日々』(Die letzten Tage der Menschheit, 1919) にも受け継がれ，「黒魔術」としての印刷インクが「世界の没落」(IV 424 ff.) を招くという危機感をまさに的中させたものに他ならない。

しかしクラウスは，ジャーナリズムの報道がもたらす実害だけを非難したのではなかった。他方ではその報道を成り立たせる言語表現を対象としたより原理的な批判も行われ，徐々に比重を増したのである。『炬火』第2号から設けられた「発行者の回答」欄で，後にはこれに代わって「グロッセ」で行われたこの批判では，「新聞の文法的あるいは論理的な

6) Josef Quack: Bemerkungen zum Sprachverständnis von Karl Kraus. Bonn 1976, S. 11. によれば，「『炬火』の最初期は具体的な社会批判の時期」であり，そこでは「公的・ジャーナリズム的な語りと様々な社会的必要性との齟齬，及び政治・経済・文化事業における種々雑多な形式の腐敗を発見すること」が重視された。

7) Helmut Arntzen: Karl Kraus und die Presse. München 1975, S. 37.

凶行」(F11, 26)や「文法のペスト」(F136, 23)などと呼ばれる報道文の問題点が実例に基づいて分析された。但し彼はこの「文体批判」(F130, 21) ないし「言語批判」(F210, 28)において,国語規範の提示を図ったのではない。彼は言語表現の誤謬や文体の拙劣さをジャーナリストの倫理的な欠陥の直接の指標と見なすと共に[8], それがもたらす社会的な悪影響に警告を発したのである。例えば彼は日刊新聞が「様々な啓示の拠点として振る舞っている」と指摘し, そこに見られる「神秘的なまでに匿名的な権力によって人々の頭脳をわがものにしようとしている不可謬性の暗示」への敵愾心を表明している(F210, 28)。大資本と広告収入によって発行部数を伸ばし, それに応じて強大な世論形成力を持つ社会的権威へと成長した近代ジャーナリズムの機構が, ここでは明瞭に観察されていると言えよう。これに対して彼が要請したのは,「一行一行において形式と思想の一致に腐心し, 概念の微妙極まりない差異を余すところなく表現することに腐心する書き方」(F210, 28)への理解であった。常套句を用いる場合のように機械的に書かれ, 受動的に読まれる「匿名的」な報道文に対して, 彼は書く側にも読む側にも積極的な創造性が要求される個性的な言語表現の擁護を訴え, 自らもそのような言語表現の実践者に属しているという認識を表明したのである。

クラウスのこのような姿勢は, F・ヴェーデキントやP・アルテンベルクなどの作家が『炬火』で活発に紹介されるようになった1903年頃から促進され, O・ワイルドの詩の翻訳が掲載された1905年の『炬火』では「危険なまでに美的な転回」(F185, 1)が宣言されるに至った。当初からクラウスの文筆活動を規定していたジャーナリズムと文学という二項対立が, これ以後顕在化することになったのである。1908年に書かれた「黙示録——読者への公開状」(Apokalypse. Offener Brief an das Publikum)で, 彼は自らの信条を次のように記述した。「私は読者たちを教育して, ドイツ語の様々な要件に関する一つの理解へと導こうとした。即ち, そこでは書かれた言葉が思想(Gedanke)を自然必然的に受肉化させることとして理解され, 単に意見(Meinung)を社会に義務づけられた覆いで包むこととして理解されるのではないような, ある高みへと。私は彼らを脱ジャーナリズム化させようとしたのだ」(IV 18)。クラウスは文学的な言語表現に「思想」, ジャーナリズム的な言語表現には「意見」という呼称を与えて両者をしばしば対比した(VIII 111 f., 122, 245)。やはり1908年のアフォリズム(VIII 113 f.)で,「意見」が彼自身の「文体」とは相容れないものとして言及されたことに見られるように, これらは彼の文体観と密接に関わっていたのである。彼の言語観は, これを起点として明確な表現を与えられて行くことになる。

ハイネに特別の関心が向けられ始めたのは, これと同時期のことであった。直接の契機となったのは, 彼が『炬火』創刊に当たって模範としたベルリンのジャーナリスト, M・ハルデンとの論争である。政治的な敵対者を失脚させるためにその同性愛を暴露したハル

8) Josef Peter Stern: Karl Kraus. Sprache und Moralität. In: A. Pfabigan (Hrsg.): Ornament und Askese. Im Zeitgeist des Wien der Jahrhundertwende. Wien 1985, S. 169 f. では, これと比較し得る言語観の所有者として, G・C・リヒテンベルク, G-L・L・ビュフォン, S・フロイトらが挙げられている。

デンの手法が，クラウスの立脚する諷刺と論争の手法と完全に敵対するものと見なされたのである。ここでは，文体上の特徴を文筆家の倫理性の指標と取る見解が実地に適用された。1908年の論争文には，「文学的な人格において思想は形式によって，形式は思想によって生きている。ハルデン氏においては，これらは哀れにも並列関係によって (nebeneinander) 生気なく生きている」(II 57) という記述が見られる[9]。クラウスは論争の際にも言語表現を「思想」として成立させることを重視したのであり，またそれを実現するために書き手が「人格」を持つことを要求したのである。これらの問題は，ハイネの論評も含めて，当時から活発に書かれ始めたアフォリズムで扱われ (例えばVIII 95, 111 ff., 123 ff.)，それらの多くがハイネ論に引用されて論述の骨子となったが，この段階ではハイネは敵対的に論じられていたわけではない。むしろ慎重な意図に基づいて機知を駆使する書き手として，ハルデンに肯定的に対置された箇所さえ見られるのである (VIII 121 f.)。そもそも，ジャーナリズムと文学という二つの領域に深く関与した点で自らと共通性を持つ人物であるハイネに，クラウスは『炬火』創刊号から言及しているが (F1, 17 ff.)，初期の論調は必ずしも否定的ではなかった。M・ボリエスは，クラウスは当時，ハイネ受容に見られたイデオロギー的な偏向への批判に力点を置いていたと述べている[10]。1906年の評論「ハイネをめぐって」(Um Heine) では部分的に批判的な記述が見られるが，そこでも主筋はハイネ受容の問題に関わるものであった。評価が否定的な傾向を増したのはハルデンとの論争以後のある時期であり，そのことがハイネ論では，次に述べるような現れ方を示したのである。

II ハイネ評価の問題点

i) ハイネとジャーナリズム

ハイネ論における論述では，それ以前のハイネ言及と比べて，ハイネのジャーナリズム関与についてのより詳細な考察が行われている。ドイツの封建主義権力との対立の結果，政治的な亡命者としての生活をパリで送り，ドイツの新聞だけでなく文芸欄を発祥させた伝統を持つフランスの新聞にも寄稿していたハイネは，その点では『炬火』創刊後一切新聞への協力を断ったクラウスと対照的な文筆家であったと言えよう。ここでのクラウスの問題意識は，無論それ以前の活動と連続性を持っていた。彼は言語をめぐる諸問題の原型をハイネの文筆活動の内に見出し，それを同時代のジャーナリズムに対する批判の新たな根拠にしたと考えられるのである。

このことは，何よりもハイネとL・ベルネが論争した「文体」と「性格」の問題への言及に認められる。ベルネがハイネの文体の無性格性を批判し，ハイネがそれに反論したとい

9) この引用文に先立ち，クラウスは「ある者が殺人者であるということは，彼の文体に不利なことを何も立証しないに違いない。しかし文体は彼が殺人者であることを立証することができる！」(II 55) と述べている。

10) M. Borries: ibd., S. 19 f. クラウスは初期のハイネ言及で，「反ユダヤ的なハイネ中傷」よりも「ハイネをめぐるユダヤ人の文学事業」の方を危険視し，より頻繁に分析したという。

う事実を[11]，クラウスは自らが重視した「文体」と「人格」の問題に関連づけたのである。例えばクラウスはハイネの叙事詩『アッタ・トロル——夏の夜の夢』(Atta Troll. Ein Sommernachtstraum, 1847) の主人公の科白を改作し，ハイネは「性格がないから才能があった (ein Talent, weil kein Charakter)」(IV 209) と述べた[12]。この観点は，クラウスがハイネの影響下にあると想定した文筆家の「類型」(IV 190) にも適用されている。即ち彼は同時代のジャーナリストたちの文体を類型的・没個性的と見なし，「この見世物でぞっとするのはこれらの才能たち (Talente) の同一性」(IV 190) であり，「もはや私たちは様々な人格を識別しない」(IV 208) と語ったのである。しかし彼はこのような事態に際して「ハイネの影響を論じることはますます焦眉の問題だ」が，「彼の作品について語ることはとっくに焦眉の問題ではなくなっている」(IV 193) という認識を表明した。即ち彼は，「ハイネの模倣者たち」または「ハイネの文体を完全に持とうとした者たち」(IV 206) に対する批判を，ハイネ本人に対する批判よりも優先していたと考えられるのである[13]。その具体的な対象として「ハイネによって生き延び，ハイネが彼らの中で生き延びている」者たちと見なされたのは，「形式 (Form) の中で生きる者たちと素材 (Stoff) の中で生きる者たち」，つまり「審美家たちとジャーナリストたち」であり，彼らは「精神から同程度に離れて住んでいる者たち」とも規定された (IV 193)。これらはそれぞれ文芸欄作家と報道記者を指すと考えられるのであり，ハイネ論の表題における「その結果」は最も直接的にはこうした書き手たちのことと理解できよう。

この主題は事実，ハイネ論の冒頭にも掲げられた。即ちクラウスは，「素材に対する無防備」と「形式に対する無防備」を「精神的な野蛮が取る二つの方向」として挙げたのである (IV 185)。これらは続いてそれぞれドイツとフランスの言語と文化に属するものとして批判されているが[14]，他の箇所ではジャーナリズム的な言語表現の特徴としても繰り返し論じられている。「素材に対する無防備」への批判に関しては，主にハルデンとハイネの比較がその契機となった。ハイネが『ルッカの温泉』(Die Bäder von Lukka, 1829) におけるA・v・プラーテンへの論争の応酬で相手の同性愛を揶揄したことが，ハルデンが行った同様の行為を「先取している」(IV 203) と見なされたのである。性愛に関する事柄を煽情的に扱って自らに有利な成果を上げようとする書き手への批判は，「モラルと犯罪」期の関心の延長上にあると考えられるが，それがここでは「素材」をめぐってのジャーナリズムと文学の問題として論じられていると言えよう。即ちハイネのプラーテン論争は「当事者

11) 彼らの論点は，Heinrich Heine: Historisch-kritische Gesamtausgabe der Werke. M. Windfuhr (Hrsg.). Bd. 4. Hamburg 1985, S. 10. で回顧されている。

12) ハイネの原文では「才能はないが，性格はある (Kein Talent, doch ein Charakter)!」となっている。(ibd., S. 79.)

13) M. Borries: ibd., S. 18. によれば，1830 年頃におけるハイネ模倣者の輩出が，クラウス以前にもハイネ批判の非宥和的な性格に多大に影響していた。

14) ここでのフランスの言語と文化への否定的評価は独断的だが，これはハイネ論の「結び」で修正を受け (IV 217 ff.)，また 1929 年にはあるフランスの女性ゲルマニストからの批判に応えてその非が認められた (F 820/26, 80 f.)。

たちへの素材的な関心と，攻撃された側に対する更に素材的な喜びだけにその名声を負っている」(IV 203) とされ，他には「外国の環境」等にも向けられるという読者のそのような「素材的な関心」(IV 187) に巧みに応じることが，ジャーナリズムの運営方法と考えられたのである。これらの記述から，「素材」という語はジャーナリズムの報道対象となる現実の事物・出来事の意味で用いられていることが特定できる。一方クラウスが文学に要請し，自らも追求したのは，「素材と形式が迅速な理解のために分離されて」(IV 207) いないような言語表現であった。

他方ここでも「素材」と並置された「形式」に対する問題意識は，「パリと共に人は今や素材だけでなく，形式をも獲得した」(IV 188) とも表現された。クラウスはここで，ハイネが亡命先パリでの諸経験を様々な作品の「素材」にしたと共に，フランス語の形式的な特性をドイツ語ジャーナリズムの言語表現に移入して，後世に悪影響を及ぼしたという見解を暗示していると言えよう[15]。これに続く記述は，クラウスの文体観を端的に示していると考えられる。即ちハイネが移入した「形式」は，「単なる内容のアンヴェロプであって内容そのものではなく，体に対する単なる衣服であって精神に対する肉体ではない」(IV 188) とされた。ここに見られる「内容 (Inhalt)」と「形式」という用語，及び人間の身体に関連した比喩がアフォリズムでも用いられた数例 (VIII 111) から知られるように，クラウスは「形式」と「内容」の代替可能な関係をジャーナリズム的な言語表現としての「意見」の特徴，両者の密接な結合を文学的な言語表現としての「思想」の特徴と規定したと言える。他の箇所では「形式と内容の一目瞭然な並列関係 (Nebeneinander)」が語られ，「そこでハイネの文芸はジャーナリズムがそれによって今日まで生きている偉大な相続財産になる」(IV 186) とされている。ハルデンとの論争でも用いられたこの「並列関係」という語に対して，クラウスはアフォリズムで「『何を』と『どう』の境界がもはや見定めがたいような相互浸透 (Ineinander)」(VIII 133 f.) の創出を自らに課した。このように「内容」と「形式」の，または「素材」と「形式」の密接な結合が求められ，「素材」と「形式」に対する「無防備」が戒められたことは彼の言語論の核心に関わっているが，これについては後に改めて論じる。

ところでハイネ論の特色の一つは，クラウスが同時代ジャーナリズムの言語表現に見出した上のような事態の原因が，他の歴史的・社会的な背景を捨象してハイネという文筆家一人に帰されるという明白な虚構にあると言えよう。ハイネに関しても，彼がジャーナリズムに依存することを余儀なくされた経済的な事情や，当時のジャーナリズムがまだ社会的に弱小勢力でしかなかった事実，また『アッタ・トロル』の序文で彼がジャーナリズム批判的な記述を行っていること[16]が無視された。一種の誇張法と考えられるこのようなクラウスの技巧は，「最新の印象主義ジャーナリズムの文体においてさえ，ハイネの範例は否定されていないのだ。ハイネあらずして文芸欄なし」(IV 186) という認識にも現れている。

15) この点については J. Quack: ibd., S. 50. を参照。
16) Heinrich Heine: ibd., S. 10 f.

その動機はハイネへの悪意ではなく，B・ケマーリングが指摘するように「クラウスが生きていた時代のジャーナリズム文体」への攻撃にあったと理解できようが[17]，ハイネを考察するクラウスの観点はそこにおいてハイネ論以前にはなかった他の特徴をも示しているのである。

ii) ハイネとクラウス

クラウスは当時，単にハイネへの批判者として文学とジャーナリズムの文体に関する一般論を展開しただけではない。例えば彼自身，ハルデンとの論争時に文体論者R・M・マイヤーから彼の文体に関する批判を受け，それに対する反論を行っている (III 310 ff., 317 ff.; VIII 332 f.)。ハイネ論で最も分量を占めているハイネの言語表現の検討も，以下に見る通りクラウス自身の文体観の婉曲な表明と見なすことができると考えられる。言い換えれば彼はハイネを，当時のジャーナリスト一般にも増して，自分自身との関連で考察しようとしたと言えよう。

その典型例は，ハイネ論中で「ハイネ的な文体における叙情詩」(IV 196) が考察された箇所の前後に見出すことができる。クラウスはそれを「聞いてよ！　聞いてよ！　と鳴る鈴の音を伴った気分もしくは意見」(IV 196) と規定し，その補説として「ハイネは常に，そしてあまりにもあからさまに情報を与えるのだ」(IV 199) と述べている。この実例の一つとして挙げられたのは『歌の本』(Buch der Lieder, 1827) 所収の詩であり[18]，その表現法は「既成の気分に衣服を着せる」流儀または「アレゴリー的」なものと論評された (IV 197)。これは，クラウス自身がハイネ論で採っている表現法を理解するための契機となる。即ち彼は，その暗示内容が多義的な解釈を許容する詩的な修辞形式を，本文中の至るところで駆使しているのである。例えば彼は隠喩を対比的に用いて，「思想」を「瘴気」，「意見」を「伝染性」と形容した (IV 202)。これらの例では，いずれも病理現象がH・ヴァインリヒのいわゆる「形象の送り手」となっているが，その種類が喚起する印象の差異を通じて「形象の受け手」に対するクラウスの価値判断が暗示されていると考えられるのである[19]。「形象の送り手」の選択自体が「形象の受け手」を叙述するための前提を内包していると言えるこのような例は，クラウスがドイツ語を身持ちの固い「ドイツの主婦」(IV 187) に擬人化し，ハイネがそれに与えたとされる悪影響を「彼はドイツ語のコルセットを緩め過ぎた」(IV 190) と表現したことにも見られる。クラウスが「モラルと犯罪」を初めとするエッセイで論じた性愛の事象に由来するこれらの形象は，後に見る通り彼の言語観を比喩的に

17) Bernd Kämmerling: Die wahre Richtung des Angriffs. Über Karl Kraus': Heine und die Folgen. In: Heine-Jahrbuch. Nr. 11. Hamburg 1972, S. 167.

18) この詩〉Ein Fichtenbaum steht einsam . . .〈には二つのアフォリズム (VIII 242 f.) でも言及され，その一つではE・ラスカー＝シューラーの詩〉Ein alter Tibetteppich〈との比較がなされたが，後者は『炬火』で「意味 (Sinn) と響き (Klang)，言葉 (Wort) と形象 (Bild)，言語 (Sprache) と魂 (Seele) が織り合わされている」(F 313 / 14, 36) と評価された。

19) Harald Weinrich: Semantik der kühnen Metapher. In: Ders.: Sprache in Texten. Stuttgart 1976, S. 297ff.

表現したものに他ならない。但しここでは，彼の用いた比喩が彼自身の見解と矛盾している。彼はハイネ批判の文脈で「アレゴリー」(IV 196) に否定的に言及したが，彼自身の表現はしばしばアレゴリー的以外の何ものでもなかったのである[20]。

他方，主に『旅の絵』(Reisebilder, 1826-31) が例に取られたハイネの散文作品に関しては，その「枠のない諸部分，構成のない全体」が揶揄され，「どこもかしこも編集し，短縮し，掘り下げたくなる」と語られている (IV 204)。この見解は，ハイネ論におけるクラウス自身の執筆法を，より直接的に語ったものと見なすことができよう。まず彼は連鎖状に連なったアフォリズム的な文章において「諸部分」の「枠」を重視すると共に，表現の簡潔さを追求したと考えられる。本稿の冒頭で触れたようにハイネ論は当初「言語問題に寄せるアフォリズム」との副題を付けられており，事実いくつもの彼のアフォリズムの引用から成り，かつまたそれらの出典となったのである。A・ディッシュなどの指摘があるように，アフォリズム性はクラウスの散文の基本的な特質であり，そこに顕著に認められる非体系性の要因となったと考えられる[21]。更には様々な修辞技法も，Ch・ヴァーゲンクネヒトが指摘しているように文章の短縮機能という観点から捉えることができる[22]。ジャーナリズムと文学のそれぞれの成果が，「偉大な言語詐欺のトリック」と「最も偉大な言語創造の達成」という対比表現で要約的に特徴づけられた箇所 (IV 188) は，その典型例であろう。ハイネ論に多様な主題が凝縮されていることは，このような短縮の結果と見なし得る。しかしハイネの散文における「構成のない全体」を指摘したクラウスは，執筆において作品全体への展望を欠いていたのではない。アフォリズムに言及があるように，彼は自らを「文構造の芸術」(VIII 114) の実践者と規定し，その基礎作業としての文章の入念な「組み立て」と「継ぎはぎ」(VIII 327) を恒常的に行ったのである[23]。ハイネ論の論旨は中断や脱線，あるいは逆行に満ち，前提部と結論部は明確に区別されておらず，またそこでは重要主題が微妙なニュアンスの変化を伴って反復され，この中で言及のある「漸層法」(IV 186) の実例を形成していると考えられるが，このことは作者の周到な意図に基づいたものであると言えよう。

クラウスの以上のような論述には，ハイネの表現法について否定的な見解を述べながら，言外に自己の表現法を暗示するという共通の型が認められる。そもそもクラウスはハイネ論と類似の主題を同時期に，例えば「シュニッツラー祭」(Schnitzler-Feier, 1912) 等の批評エッセイでも扱っているが，対象作家の言語表現を自らとの比較を含意しつつハイネ論ほ

---

20) この点については Harald Kaufmann: Über die aufgehobene Allegorie. Beobachtungen an Werken von Nestroy und Karl Kraus. In: R. Mühlher / J. Fischl (Hrsg.): Gestalt und Wirklichkeit. Berlin 1967, S. 529 ff. を参照。

21) Andreas Disch: Das gestaltete Wort. Die Idee der Dichtung im Werk von Karl Kraus. Zürich 1969, S. 83.; Elias Canetti: Karl Kraus, Schule des Widerstands. In: Ders.: Das Gewissen der Worte. Darmstadt 1976, S. 46.

22) Christian Wagenknecht: Das Wortspiel bei Karl Kraus. Göttingen 1975, S.48 ff.

23) この点については Ch. Wagenknecht: Korrektur und Klitterung. Zur Arbeitsweise von Karl Kraus. In: H. L. Arnold (Hrsg.): Karl Kraus (Sonderband text+kritik.). München 1975, S. 108 ff. を参照。

ど詳細に論じた例は他にはない。また彼は，ハイネの作品でも後期の『ロマンツェーロ』(Romanzero, 1851) は積極的に評価している (IV 205 f.)。これらのことは，クラウスがハイネを自らの規範となる文筆家の一人と捉えていた可能性を示唆するのである[24]。このことは「ハイネにアフォリズムの能力があったら」(IV 204) という仮定が語られる箇所や，ハイネの散文が「観照のない機知，機知のない見解」(IV 193) と規定された後でハイネの「機知」が頻繁に論じられる箇所で確証されよう。例えば彼はハイネの韻文と散文における機知を「喘息を患った駄犬」に譬え，「ハイネは彼のユーモアを大仰な言辞の高みへ駆り立て，そこから追い落とすことができない」(IV 201) と述べている。また「様々な対照世界を最小の平面に追い立て，従って最も価値あるものである言葉の機知」が，ハイネのもとでは「締まりのない駄洒落」にならざるを得ないとも語った (IV 203 f.)。これらは表現の上で明らかにアフォリズム (VIII 114 f.) におけるクラウスの見解を踏襲している上，「大仰な言辞」や「言葉の機知」はハイネ論を初めとする彼の著作を実際に特徴づける技巧でもあった。ここには，クラウスのハイネへの自己投影が最も鮮明に現れている。ハイネとジャーナリズムの関係と並んで，このような文章表現上の類似性の意識は，クラウスがハイネを論じた動機の根幹に関わると考えられる。しかしこの類似性の範囲は，それだけに留まっていたのではない。まさに中心主題としての言語観の上でも，クラウスはハイネを参照することによって自己主張を行ったのである。

III 言語観をめぐる接点と対立点

ハイネ論には，数箇所で直接的にクラウスの言語観が語られている。そのうち最も詳細な例は，ハイネの論争文『ルートヴィヒ・ベルネ——ある回想録』(Ludwig Börne. Eine Denkschrift, 1840) からの引用に始まる末尾の記述 (IV 209 f.) である。引用の出典は，ハイネが「書くに際してただ瞬間的な霊感だけが筆を導く書き手，言葉に命令を下すよりは言葉に服従する書き手の一団」に対して，自らのことをも暗示した「言葉の巨匠たち」，即ち「言葉をどんな任意の目的にも用い，恣意に基づいて言葉を形作り，客観的に書く」書き手を対置し，その文体の無性格性を承認したくだりであった[25]。クラウスはこの規定を補足し，前者を「芸術家」，後者を「ジャーナリスト」と呼んだのである。これに続いてハイネに「言語を利用して (mit der Sprache) 創られ得る最高のもの」が帰されたことからも知られるように，ハイネはここで「言葉」あるいは「言語」を既成の意味内容を単に表現し伝達する手段として使う書き手として提示されていると言えよう。これは「意見」において，「形式」が「内容のアンヴェロプ」(IV 188) に過ぎないとされる場合に該当すると考えられる。これに対してクラウスは「言語の中から (aus der Sprache) 創造されるもの」(IV 209) により高い価値を認め，「思想となり得るものは全て諸言語の中にある」(IV 187) ことを主

24) エーバーハルト・シャイフェレ「雄弁家ハイネ」，鈴木謙三訳．『ハイネ研究』2号．東洋館出版社．1978年．90頁では，ハイネとクラウスの修辞技法上の類縁性が示唆されている。

25) Heinrich Heine: Historisch-kritische Gesamtausgabe. Bd. 11. Hamburg 1978, S. 121.

張した。これは「思想」において，「形式」が「内容そのもの」(IV 188) とされる場合に当たるであろう。彼にとって「思想」は「形而上的な経路」を通じて得られるものであり，「思想と詩は思想家と詩人に先立って存在した」のである (IV 202)。彼はこうして，意味内容が「言語」それ自体から新たに生み出される可能性を説いたと言えよう。彼の文体論は，ここでその言語論的な性格を顕在化させるのである。

しかしクラウスは，「思想」表現への作者の関与を否定したのではない。「ドイツ語という女は自らの子供を作れる者のためにだけ詩作し，思考する同伴者だ」(IV 187) というアレゴリー的な記述に見られるように，彼は言語の創造力を引き出す書き手の役割をも強調した[26]。言語の女性への擬人化は，何よりもこのような言語と書き手の相互作用を叙述するためのものであったと考えられるのである。そこで目標となったのは，「書かれざる 100 頁の言語を造形する (gestalten)」(IV 209) こと，または「形式」を内実のある「形姿 (Gestalt) へ高める」(IV 205) ことであった[27]。これは「思想」において，多義的な意味内容を伝える簡潔な表現形式が志向されたことを意味していると言えよう。換言すればクラウスは，言語表現における形式をそのつど新たな意味内容と密接に結合させ得ると見なしていたのであり，この観点から，一義的な意味内容を固定的に表象する新聞の記号化した常套句や浅薄な装飾表現を非創造的と捉えたと考えられるのである。「言語的な生殖という歓喜の中でのみカオスから世界は生じる」という見解 (IV 202) は，彼が意味を秩序化された規範ではなく不断の生成からもたらされると見なしていたこと，及びこの生成への関与に多大な喜びを見出していたことを示している。また「言語は書き手と話し手に共通の表現手段である」(IV 208) という通念への批判的な言及は，彼が情報伝達には還元され得ない創造作用を言語本来の属性と考えていたことを推測させる。但し，彼は表現を一回的な偶然に委ねたのではなかった。アフォリズムで「文筆家は自分の言葉が開示するかも知れない思考過程を，全て熟知していなければならない。自分の言葉によって何が起こるかを，心得ていなければならない」(VIII 122) と語られたことが暗示するように，彼は校正以後の段階で明らかになる意味生成の可能性にも細心の注意を払ったのである。「芸術家の業績は良心の咎めである。彼は手を出すが，手を出した後でためらうのだ」(IV 208) という記述は，「歓喜」の対極にあるこのような作業を指すものであろう。

そのような作業の帰結は，やはり性愛の領域に由来する隠喩によって「古い言葉の誕生という不思議」(IV 210) と表現された。他の箇所ではジャーナリストに「古い言葉を発見する能力の欠如」(IV 190) が帰されているが，「誕生」し「発見」されるものに「古い」という形容は矛盾であるという意味で，ここでは対義結合が用いられていると言える。この

26) この点で，ハイネ論でのクラウスの立場が，芸術の「自由」を否定するという意味での「プラトン的な言語理念」であるという Max Bense: Metaphysische Positionen. In: O. Mann / W. Rothe (Hrsg.): Deutsche Literatur im 20. Jahrhundert. Strukturen und Gestalten. Bd. 1. Bern 1967, S.374 f. の見解は適切でないと考えられる。

27) クラウスの『言語』所収の〉Wortgestalt〈(1921) では，この見解が敷衍されている (VII 285 ff.)。同じく〉Die Sprache〈(1932) の冒頭では，„Gestaltung“ と „Mitteilung“ が対置されている (VII 371)。

修辞法の趣意は，クラウスが自らの諷刺文に与えた次のような説明から考察することができよう。「『炬火』の様々な文章は，それが結びついていた出来事が私たちを助けた時でさえも，何と読みにくかったことか。いや，それが助けたからこそだ！ 私たちが出来事から離れれば離れるほど，それについて何が語られたかは，私たちにとって理解しやすくなるのである」(IV 192)。これに先立つ箇所では時事的で地方的な「素材」を創作の「契機」としつつも，永続性の点ではこれに依存しない芸術作品の可能性が語られている。これは，クラウスの特徴的な諷刺理解であったと考えられる。彼にとって「叙情詩と諷刺」(IV 200)，及び「叙情詩もしくは機知」(IV 202) は調和が可能なものであったのに違いない。事実，前章で見た彼の修辞技法は，当時のウィーンの文化状況と密接に関わる「素材」を，詩的かつ批判的な文脈の中に置き換えることに貢献していた。彼の文体観との関連で言えば，このことは「素材」の「内容」ないし意味を「形式」の作用によって多義的に変容させることとして捉えることができよう。彼がこれら三つの文体要素に求めた一致，あるいは「創造的な必然性」(IV 199) の実現はこの過程として理解できるのであり，更にその所産が作者の「人格」や「性格」の刻印を帯びていることをクラウスは要請したと言える。この観点から見れば「古い言葉の誕生」とは，時事的な「素材」を指示する日常的な「言葉」が，全く新たな意味の相の下に現れることと解釈することができるのである[28]。また，執筆に際して「形式」の作用とそれが「素材」の意味にもたらす変化に無自覚であることが，それらに対する「無防備」として批判されたと考えられる。

ところで上の対義結合に見られたような矛盾表現を，クラウスは次の箇所でも意識的に用いている。「自らの思想が必ずしも新しいには及ばないのと同様に，新しい思想を持つ者は，その思想を容易に他者から得ることができるのだ。このことは全ての者たちにとって逆説的であり続けており，そうでないのはただ，思想の先行形成 (Präformiertheit der Gedanken) を確信している者にとってだけである」(IV 201 f.)。ここでいう「思想の先行形成」は先に触れた言語の創造作用に関わる語であると考えられるが，その含意はこれに尽きるのではない。クラウスはこれに続く言語論的な記述で，繰り返し引用の技法について語っていると考えられるのである。それ自体に〉ein ehrlicher Finder〈という常套句が引用されて，「思想を探す者は正直な拾得者であり，例え彼より先に他人が既に思想を発見していたとしても，その思想は彼のものである」(IV 202) と語られた一文はその典型例と言えよう。事実，W・ベンヤミンが先駆的に指摘したように[29]，クラウスはその作品中で各種の引用を多用した。ハイネ論ではアフォリズム以外にも自作からの引用が数箇所でなされている他，シラーを初めとする人々の作品からの暗示引用や常套句への当てこすりが随所に見られる[30]。既に語られた言葉が異なる意味連関の中に移し替えられるという点では，引用文もま

28) 『言語』所収の〉Nicht einmal!〈(1921) で言及された「様々な決まり文句に生命を吹き込む」(VII 225) などの技法も，これとの関連で理解し得る。

29) Walter Benjamin: Karl Kraus. In: W. B.: Gesammelte Schriften. R. Tiedemann / H. Schweppenhäuser (Hrsg.). Bd. II-1. Frankfurt am Main 1977, S. 362 ff.

30) 詳細は Ch. Wagenknecht (Hrsg.): Karl Kraus. Heine und die Folgen. Schriften zur Literatur (Reclam 8309). Stuttgart 1986, S. 299 ff. を参照。

た「古い言葉」として「誕生」する可能性を認められていたことはあり得よう。但しハイネ論で数度の明示的な引用がなされたゲーテ[31]，そして特にハイネの場合は，原作の言葉が単に引用による「造形」の材料として用いられただけとは考えられない。既に見たように，クラウスは批判対象であるはずの当のハイネからの引用に基づいて，中心主題である彼の言語観を語っている。即ちクラウスの言語観は，ハイネのもとでまさしく「先行形成」されていたと言うことができるのである[32]。

このことの根拠の一つとして挙げ得るのは，上の言語論的な記述が，クラウスが自己とハイネの「機知」を比較した箇所 (IV 199 ff.) の直後に現れることである。また更に，『言語』に収められたエッセイ「ある剽窃者の犯罪証明」(Überführung eines Plagiators, 1921) には，クラウス自身がこの問題により直接に触れた一節が見られる。即ちそこで彼は，F・ヴェルフェルの詩の韻律を借用した自作の詩の原作者があくまでも自分自身であることの理由として，「既に「ハイネとその結果」でもっと著名な例によって指摘された先行模倣 (Vorahmertum) の事例」(VII 218) がヴェルフェルにも見られると述べたのである[33]。「模倣する (nachahmen)」からの連想によると考えられる「先行模倣」という造語は，ハイネ論と同時期に書かれたアフォリズムでも他の形で使われている。「原作を先行模倣する者 (Vorahmer) がいる。ある思想を二人が持つ時，その思想はより早く持った者ではなく，より良く持つ者のものなのだ」(VIII 237)。これらの記述はクラウスの独特の引用理解がハイネに適用されていた可能性をより高めると共に，ハイネがベルネとプラーテンへの批判の中で行った様々な言語言及を，クラウスがハイネ論の末尾 (IV 209) で比較対照した動機への手掛かりを与えるであろう。そこでクラウスは，自らの言語観と相似したハイネの言語観がハイネの実際の言語表現とは矛盾していることを主張しているのであるが，それはまさにクラウスがハイネ的な言語観を「より良く」持っているという自負の暗示であると考えられるのである。このことは，ハイネに対して否定表現を列挙することで婉曲に自らの信条を表現した最終部の記述 (IV 209 f.) からも看取することができよう。ここでクラウスのハイネ批判は，その両面価値性を露呈させる。しかし彼が初期の活動の延長上でハイネを論じたことの意味は，論旨のこの破綻の中にこそ示されていると考えられるのである。

---

31) 『言語』の標語の冒頭には言語に関するゲーテのアフォリズムの一つ („Ein jeder, weil er spricht, glaubt auch über die Sprache sprechen zu können.") が掲げられており (VII 7)，これと酷似した表現がハイネ論にも見られる („Dieser Typus [...] hat in der Kunst der Sprache, die jeder, der spricht, zu verstehen glaubt, schmerzlichen Schaden gestiftet.": IV 208)。またハイネ論では，ニーチェへの明示的な言及も論旨の展開の上で重要な役割を果たしている (IV 202, 207 f.)。

32) 他の例では，クラウスは「芸術家」を „ein Diener am Wort" (VIII 116) と定義したが，これはハイネが〉Vorrede zum Salon. I. Band.〈(1833) で用いた „die Diener des Wortes" という表現の改作であることが考えられる。

33) なお 1917 年に書かれた〉Die Literaturlüge auf dem Theater〈(F 457 / 61, 53 ff.) でも，「思想の先行形成」が語られるハイネ論の一節 (IV 202) が一部引用され，F・ヘッベルの詩〉Die Sprache〈においてクラウスの言語観が「先に」発見されていたと主張されている。

IV 言語観と諷刺理解

前章までに見たクラウスの論述には，先行者ハイネと自らとの差異を強調しようとする態度が顕著であった。その結果，ハイネに対して「歴史的な公正さを適用する」(IV 193) 必要が自覚されていたにも拘らず，ハイネのジャーナリズム関与のあり方が歪曲を受けたことは既に述べた通りである。またハイネの文体の批評に関しても，例えば例文の出典が偏っているなどの不備は否めない[34]。しかしハイネ論の「後書き」で，「この著作はハイネという問題を汲み尽くさないが，それ以上のものを汲み尽くす」(IV 213) と注記されたことからも判るように，これをクラウスの意図的な戦略と理解しなければならないことは明らかであろう。即ち彼はここでハイネを比較の対象とすることで，自らの文学活動の独自性を主張しようとしたと考えられるのである。「言語問題」は，その最大の眼目であったと言えよう。この点でのクラウスの見解は事実，現代のハイネ研究の成果と符合しているように見える。例えば「言葉の巨匠」としてのハイネの自覚は彼の政治的な意識の増大と軌を一にして実際に彼の言語表現を規定しており[35]，また彼の思想圏において言語という主題は副次的な位置に留まっていたという指摘がなされている[36]。それに対してクラウスはハイネ論の時期に，ジャーナリズムの強大化によって変化した社会と文学の状況の洞察に基づいて，言語への問題意識を前面に掲げた諷刺家として転回を遂げようとしたと考えられる。彼が当時行った『炬火』の完全な個人誌化や朗読会の開始は，そのような動向との関連で考察できよう。そしてハイネ論は，このことを自他に確認するための宣言文であったことが推定され得るのである。従ってここでなされたのは単なるハイネ攻撃ではなく，ハイネの文体と言語観に端を発する文学伝統の批判的な継承であったと言えよう。

事実ハイネ論には，「ハイネはいとも卑小な諷刺家だったため，彼の時代の愚劣さが後世にも及んだのだ」(IV 208) という記述が見られる。ここではハイネが諷刺家として，他の箇所でのJ・ネストロイ (IV 188) とJ・オッフェンバック (IV 198, 206) 同様，クラウス自身と比較されたのである。この記述は，次のようなクラウスの目的意識との対照で考察できよう。「ある思想にこの上なく微かに光を当てたり陰影を付けたり，それの調子と色彩を整えたりすること，このような仕事だけが真に失われていないのである。このような仕事は，直接的な作用にとってはどれほどせせこましく，笑止かつ無意味であっても，いつかは一般社会の役に立ち，遂には一般社会に対して当然の収穫物としてのあの様々な意見の埋め合わせをするであろう。即ち一般社会が今日，邪悪な欲望によって青田売りをしてい

34) M. Borries: ibd., S. 64 ff. によれば，ハイネの詩の引用 (IV 199) に際してクラウスが省略した部分などには，ハイネの慎重な文体意識が認められる。

35) Takanori Teraoka: „Meister der Sprache". Zu Heines schriftstellerischem Selbstverständnis. In: Doitsu Bungaku. Nr. 79. 1987, S. 125 ff. によれば，ハイネの言語支配の思想の成立は，彼が新聞などを通じて革命の理念を普及させようとする意図に促されたものであったという。

36) Klaus-Hinrich Roth: Sprachreflexion bei Heinrich Heine. In: W. Gössmann / M. Windfuhr (Hrsg.): Heinrich Heine im Spannungsfeld von Literatur und Wissenschaft. Essen 1990, S. 172.

るあの様々な意見の」(IV 202)。ジャーナリズム的な「意見」に文学的な「思想」を対置する意図は，読者を教育的ないし啓蒙的に「脱ジャーナリズム化」させることに関わっていた。それがここでは，「一般社会」に利益をもたらすという意味での倫理的な要件として明確に提示されたのである。このことは，クラウスの言語観から次のように説明され得るであろう。即ち彼は「形式」と「内容」が分離した「意見」に，一定の意味を固定的に表示する記号としての言語の様態を見出していた。それが思考形態の画一化や思考操作に直結して様々な「破局」の原因になり得る危険性を彼は早くから洞察し，警鐘を発したのである。劣悪な文体が「人格」の欠陥の指標とされたのは，そうした文体を生んだ言語の道具的な使用がそれ自体倫理的な悪と見なされたからであると言えよう。

それに対してクラウスは，「思想」の成立に際して作用する言語それ自体の創造性を引き出すことを，自らを含む文筆家の課題とした。このことはハイネの叙情詩が作曲されて人口に膾炙していることが揶揄された後，次のように主題化されている。「芸術は生を混乱の中へ運ぶ。人類の詩人たちは繰り返しカオスを作り出すのだ。他方，社会の詩人たちは世界秩序の中で歌いかつ嘆き，祝いかつ呪う」(IV 196)。ここで示されているのは，言語の意味を所与のものとして自明視する書き手と，それを「カオス」から生成するものと捉える書き手との対立と考えられる。続く箇所で実例として挙げられているのはそれぞれハイネとゲーテであるが，「詩人たち」と複数形で語られている以上，これは言語芸術家に関する一般論と見なすべきであろう。即ちクラウスは，「読むことが暇つぶしであるような全ての世界」(IV 188) に迎合する詩人に対する優位を，「読者から離れること」(IV 187) を言語創造の次元において実行する詩人に与えたのである。彼自身の諷刺作品が，その実践の産物であった。彼の意図通りに読みの努力を強いるハイネ論のテクスト自体，読者を「脱ジャーナリズム化」させるための習練を課すものとして書かれたと言えよう。このことが単なる意味秩序の無目的な撹乱の意志に動機づけられていたのでないことは，言うまでもない。「良心の咎め」(IV 208) や「言語の恩寵」(IV 210) などの宗教的な隠喩を用いた表現に見られる通り，彼はこのような詩的言語の実践をジャーナリズムによる災害からの予防もしくは救済策として評価し，そこに至上の価値を認めたと考えられるのである[37]。彼が文学とジャーナリズムの混淆を非難した動機も，このような観点から理解できる。

但しこのような社会関与の方法が，現実の政治的・社会的な問題への取り組みから退却した印象を与えることも事実である。クラウスが「ハイネという芸術的な問題」と並んで「ハイネという知性的な問題」を挙げ (IV 207)，「ハイネの名誉に包まれた啓蒙的業績」を否定的に論評したこと (IV 208) は，この印象を更に強めると言える。実際 S・P・シャイヒルは，ハイネ論の時期にクラウスが社会的に著しい保守化傾向にあったことを指摘した[38]。経歴の上では，カトリックへの入信がこのことを示す端的な指標であろう。またハイネ論

37) 『言語』所収の〉Die Sprache〈(1932) 末尾における「人よ言語に仕えることを学べ！」(VII 373) という呼びかけも，この意味で理解できる。

38) Sigurd Paul Scheichl: Politik und Ursprung. Über Karl Kraus' Verhältnis zur Politik. In: Wort und Wahrheit. Nr. 27. Wien 1972, S. 43 ff.

の本文でも，地方詩人と見なされたD・v・リーリエンクローンがハイネ以上に「宇宙的」(IV 207) であったという見解が語られ，ハイネが外部世界への脱出を敢行した『出エジプト記』17章6節でのモーゼに戯画的に譬えられている (IV 209)。これと対応すると考えられるのは，ドイツの言語または文化が密閉された住居を連想させる形象によって語られ，ハイネがそこへの侵犯者として描かれていると解し得る一連のアレゴリー的な記述 (IV 188, 206 f., 207 f.; Vgl. IX 93) である。そこには，「美的な転回」の宣言にも現れていた政治性の忌避が見られると言えよう。しかしここで，クラウスが明らかに自らを「社会の詩人」に対立する「世界の詩人」の一員と見なしていたことを看過してはならない。彼の諷刺はあくまで同時代の普遍的読者への啓蒙的な働きかけを志向する文学として創造されたのであり，特定の読者層だけによる受容が前提されていたのではないのである。確かにハイネ論の時期にはこれと矛盾する行動も取られたが，第一次世界大戦終結をいわばもう一つの転回点とし，オーストリア社会民主党との連携を通じてなされた短期間の積極的な政治参加が示すように，彼の社会的な態度は流動的であった。またハイネ論の時期に彼がベルリンへの逃走を計画していたこと[39]は，亡命詩人としてのハイネ像の検討がクラウス自身の火急の問題であったことを推測させる。即ち政治的・社会的な問題においても，ハイネは単なる攻撃対象であったとは考えられない。クラウスは自らが取るべき姿勢を，政治と文学という二つの領域の相剋の中で創作を行い続けたハイネ[40]の先例によって模索したと見なし得るのである。少なくともM・ボリエスのように，クラウスを芸術及び政治における保守陣営に断定的に帰することが不適切であることは疑いない[41]。

このようなクラウスの諷刺の社会的な意義は，例えばフランクフルト学派の論者たちの社会学的な著作において評価されている[42]。J・F・ボディーンの要約に従えば，そこではクラウスが各種の政治的なイデオロギーに対する「メタ批判」を行ったことが指摘されたのであり，ハイネ論の読解にもこの観点が導入される必要があるとされる[43]。このような見解は，クラウスの言語観で言語に対する思考の依存が主題の一つであることから当然導かれ得るものであろう。実際またハイネ論では，ハイネをめぐるイデオロギー的な通念[44]に対

39) Paul Schick: Karl Kraus in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten. Hamburg 1965, S. 60.

40) この点については，岩本真理子『ハイネにおける芸術と社会批評の問題』九州大学出版会，1993年，18頁以下及び129頁以下を参照。

41) M. Borries: ibd., S. 45 ff., 72 ff., 96 ff. なお同氏のクラウス読解の問題性は，彼の言語観を現代の言語懐疑思想と無関係と見なす見解に最も顕著に現れている (S. 43 ff., 94 ff.)。

42) この点については Theodor W. Adorno: Einleitung zum ›Positivismusstreit in der deutschen Soziologie‹. In: T. A.: Gesammelte Schriften. Bd. 8. R. Tiedemann (Hrsg.). Frankfurt am Main 1990, S. 328 ff.; Max Horkheimer: [Karl Kraus und die Sprachsoziologie]. In: M. H.: Gesammelte Schriften. Bd. 13. G. S. Noerr (Hrsg.). Frankfurt am Main 1989, S. 19 ff.; Herbert Marcuse: Der eindimensionale Mensch. Studien zur Ideologie der fortgeschrittenen Industriegesellschaft. In: H. M.: Schriften. Bd. 7. A. Schmidt (Übers.). Frankfurt am Main 1989, S.209 ff. を参照。

43) Jay F. Bodine: Heinrich Heine, Karl Kraus and《die Folgen》. A Test Case of Literary Texts, Historical Reception and Receptive Aesthetics. In: Colloquia Germanica. Bd. 17. I / 2. Bern 1984, S. 18 ff.

44) M. Borries: ibd., S.19 f.

して言語思想家としてのハイネ像が先駆的に提示されたとも言えるのである。クラウスによる問題提起とも見なし得るこの主題は，H・エーデラーによって言語批判の文学の系譜におけるハイネとクラウスの関連づけとして考察されている[45]。これらの文献には，ハイネ論におけるクラウスの文体の「形式」をその意味の表層と安易に同定する危険を回避し，その上で「ハイネ」という「素材」に彼が託した諸問題の「内容」を解明する方向性の一端が示されていると言えよう。言い換えれば，ここで行われたのは決してハイネの作品と思想の否定ではなかった。クラウスの諷刺作品がどれもそうであると考えられるように，この場合にも「素材」の批判的な扱いを通じて暗示される積極的・肯定的な要件が重要なのである。ハイネに対する対決的とも言える態度や誇張法を初めとする修辞が不用意な追随か反発を招きやすいことは確かであろうが，ハイネ論における文体と言語に関する理論は，ハイネ論自体に適用できると言えよう。この意味でこのエッセイは，クラウスの言語観と諷刺理解への指示が統一的な文脈において語られた著作としても，彼の生涯の中で特別の位置づけを要請すると考えられるのである。

Der Wendepunkt zum „Sprachproblem“ bei Karl Kraus

—— Probleme in dem Essay ›Heine und die Folgen‹ ——

KAWANO Eiji

Karl Kraus' Essay ›Heine und die Folgen‹, der in einer Übergangszeit seines Lebens entstand, hat den sichtbaren Charakter eines Manifests. Ausgehend von diesem Gesichtspunkt wird geplant, die ambivalente Bewertung von Werken und Gedanken Heinrich Heines, wie sie sich in diesem Heine-Essay findet, in ihrer eigentlichen Absicht zu betrachten.

Das Hauptthema dieses Essays ist das „Sprachproblem“, das aus der Kritik am Journalismus stammt, die Kraus seit der Gründung seiner satirischen Zeitschrift ›Die Fackel‹ bis dahin geübt hatte. Inzwischen polemisierte er gegen verschiedene Übel des Journalismus: oft aufgrund sprachlicher Defizite in ihm. Denn falsche Ausdrücke und schlechter Stil waren für Kraus nichts anderes als Merkmale ethischer Mängel des Schriftstellers. Dabei wurde die Vermischung von Journalismus und Literatur im damaligen Wien am heftigsten getadelt. Nach Kraus muß der literarische Sprachausdruck („Gedanke“) als der charaktervollere, der von Schreiber und Leser positives

---

45) Hannelore Ederer: Die literarische Mimesis entfremdeter Sprache. Zur sprachkritischen Literatur von Heinrich Heine bis Karl Kraus. Köln 1979, S. 3 ff. 同氏はハイネとクラウスを時代的に仲介する人物として更に Ferdinand Kürnberger を挙げ，三者に「模倣と立証と批判を一体化させる共通の伝達形式」(S. 10.) が見られると述べている。

Schöpfertum fordernde, gegen den journalistischen Sprachausdruck („Meinung") als den nur anonymen beschützt werden, der mechanisch geschrieben und passiv gelesen wird. Dazu machte er es sich zu seiner aufklärerischen Aufgabe, seine Leser zu „entjournalisieren".

Im Heine-Essay wird die Genesis dieser „Meinung" fiktiv und hyperbolisch dem Stil von Heines Prosa und Vers zugeschrieben. Kraus behauptete, daß dabei das Interesse des Lesers am „Stoff" vorausgesetzt wird und Heines „Form" und „Inhalt" nur ein „Nebeneinander" formt. Dagegen verlangt Kraus vor dem „Stoff" das Primat des „Ineinanders" von „Form" und „Inhalt", das dem „Gedanken" attribuiert wird. Im Zusammenhang mit der Untersuchung von Heines Stil zeigt er andeutungsweise die Theorie seiner eigenen Stilschöpfung. Dabei handelt es sich um die Vieldeutigkeit und Kürze des Wortes, die in seinen Tropen und aphoristischen Sätzen verwirklicht sind. In diesem Punkt scheint Kraus Heine zu seinem meist negativen Muster zu machen, wie es aus der Erörterung über den „Witz" Heines zu ersehen ist.

Dies betrifft auch die Sprachanschauung bei Kraus. Er redet hier von der Sprache, indem er mehrere Äußerungen Heines über die Sprache zitiert. Kraus reduziere als „Meister des Wortes" nicht wie Heine die Sprache auf das kontrollierbare Werkzeug, sondern traue ihr eine autonome Schöpferkraft zu, aus der die Bedeutungen immer aufs neue hervorgehen. Dies wird durch das Oxymoron „die Geburt des alten Wortes" mit erotischer Konnotation bezeichnet. Kraus' poetisches wie satirisches Ziel kann darin erkannt werden, „die Sprache der hundert ungeschriebenen Seiten" zu „gestalten", mit anderen Worten, mit der Wirkung der „Form" dem „Stoff" neugeborene vieldeutige „Inhalte" beizumessen. Als ein solcher „Gedanke" über die Sprache kann auch das Paradox der „Präformiertheit der Gedanken" genannt werden, das aber noch einen anderen paradoxen Fall andeutet: daß auch Kraus' Sprachanschauung gegenüber Heine schon „präformiert" worden war.

Schließlich wird Kraus Heine mit sich selber verglichen haben, um die Eigenartigkeit seiner Satire zu betonen, die anders als bei Heine den ethischen Anteil in der Sprache in den Vordergrund rückt. Auch bei den sozial konservativen Stellungsnahmen des damaligen Kraus war Heine vermutlich das Muster. Aber hier darf nicht übersehen werden, daß Kraus ihn selbst unter „die Dichter der Menschheit" rechnet. Seine Konfrontation mit Heine kann trotz ihrer Ungerechtigkeiten als Strategie begriffen werden: hier wurde eine kritische Übernahme der Heineschen Tradition vorgenommen, nicht ein bloßer Angriff. Als ein positives Ergebnis davon zeigte Kraus Heines sprachtheoretische Leistungen als Vorläufer auf. Und seit diesem Essay ergab sich auch Kraus' eigene Sprachanschauung. In diesem Sinn stellt diese Schrift einen Wendepunkt in seinem Schaffen dar.